一次創作であるカルーアミルクのパロディです。

攻め：篠崎(シノザキ)
受け：安西 諒(アンザイ リョウ)

※この話には安西の陰茎切除が含まれますが、
手術シーンやグロい内容は一切ありません。
同意の上で、病院で寝ている間に終わっているやつです。
玉は残っています。
亀頭の一部をクリトリスにしています。

※この話には魚にイかされるシーンがあります。

※安西がとても辛い思いをしますがドMなので大丈夫です。愛に溢れています。
愛に溢れています。(二回目)

一.
「諒くん、諒くんにはもう、おちんちんは必要ないな？」
「ッ……はい…」
「きちんと言いなさい」
「僕には…おちんちんは必要ないです…」
「いいこだ」

二.
「まずは三日。三日、おちんちんを勃たせないようにしよう」

「はい…」
　カチャカチャと軽い音が響く。ペニスが人工物に覆われていく。自由を失っていく。
「触れないが、排泄はできる」
「ん……きつい…」
「おちんちんをダメにするんだろう？少しきつめでないと」
「はい…」
「立って排泄はできないから、女のように便座に座って排泄しなさい」
「はい」
「三日我慢できたらご褒美をあげよう」

〜〜〜〜
「水槽に登って、うつ伏せになりなさい」
　備え付けられた階段をゆっくり登り、上から水槽を見下ろすと無数の魚が泳いでいるのが見える。蓋が割れぬようそっと膝をつき、篠崎を振り返る。男はすぐに意図を汲んだようで、手の拘束を解いた。
「おちんちんを穴に入れなさい」
　言われてよく見ると平らな面と凸の接合部に丸い穴が開いている。たくさんの魚の中にペニスを入れる恐怖。しかしそれよりも性的興奮が勝った。解放された手をつき、穴にペニスが入るよう狙いを定めてゆっくりと体を倒していく。水槽の蓋は水面に触れるように設置してあるらしく、亀頭が穴に入った瞬間常温の水に触れた。蓋のぎりぎりまで水が入っているせいで、安西のペニスの体積分がゆっくりと穴から溢れ出し、安西の玉を濡らしていく。
「ああ……」
　あっという間にペニスの挿入が終わった。すぐさま篠崎にベルトで手足と腰を拘束され、水槽から離れられなくなる。暴れることもできない。
「諒、魚にイかせてもらいなさい」
「え？あっ、うそっ！！あっ、やだっ、やめっ、」
「中の魚はドクターフィッシュだ。魚が満腹になるまでにイきなさい」
「あああっ、やめっ、やだぁっっ！」
　気持ちいい。たくさんの魚がペニスをつついている。カリの部分、亀頭、尿道口。魚がツンツンと安西の恥垢に食いついてくる。三日間、洗わせてもらえず溜め込んだ汚れ。それらが今、篠崎の目の前で魚に食べられている。
「ああっ、もっと！　もっと、強く食べてええ！」

〜〜〜〜

「すごいな…痛くないのか？」
「痛い…です…」
　ペニスをまじまじと見られ、感心したように聞かれる。痛くないはずがない。勃起を阻害されているのだ。
「篠崎、はやく…」
「うん、早く終わらせるよ」
「え…？」
　早く終わらせる、とはどういうことだろう。不思議に思って篠崎を見ると、篠崎も服を次々と脱いで全裸になった。
「諒、可愛い……おちんちん締め付けられているのにこんなに健気に乳首を勃起させて…」
「あっ！！」
　不意打ちで乳首を摘ままれ、身体が跳ねる。
「諒、諒……」
　痛いことは理解してもらったのだからもう外して貰えるだろう。そう思ったのに、篠崎が次に触れたのは安西の貞操帯ではなく篠崎のペニスだった。
　それはもう、カウパーを垂らしていた。大きくて、浅黒くて、血管が浮いている。安西の大好きな篠崎のペニス。
「は、気持ちいいよ…」
「え、やだ、しのざき、」
　篠崎は自身を扱いていた。安西の可哀想なペニスを見ながら。
「や、篠崎っ、」
「諒……久しぶりに諒を味わいたい」
「しの…ざ……？」
　瞬間、パクリ、と咥えられた。
「ッッ！！」
　貞操帯ごと。リングの隙間から篠崎の肉厚で熱い舌がねっとりと安西のペニスを舐める。勃起すらできない、一ヶ月以上射精を禁止されているペニスを。

〜〜〜〜

「やだぁっ、もぉっ……もおやだぁっ…」

いやいや、と溢れた涙を拭うことなく首を振る。
「篠崎っ、たすけてっ、」
苦しくさせているのは篠崎だというのに、篠崎に助けを求める。
「諒」
「おちんちんつらいっ、辛いからぁっ…おちんちん壊してっ…！！」
「…どうやって壊してほしい？」
そう聞きながら、篠崎は見せつけるように自分のペニスを扱いている。
「わかんなっ、もおおちんちんいらないからぁぁっ！！」
「おちんちん、手術で取ってしまう？」
「ァッ……や、」
「いらないんだろう？」
「だってぇっ！ぢんぢん痛いいい！！痛いいいいい！だすげでぇ──！」
「うん、じゃあ手術でおちんちんないないしようか」
「するっ！おちんちんないないしてぇえええ──！！」
もう何も考えられなかった。苦しいのから逃れたい、その一心だった。
「いいこだ……これでおちんちん辛いのから解放されて嬉しいな？」
「うれしっ、もぉ辛いのやだああっ──！！おちんちんいらない──！！」
「っく、」
辛くて、苦しくて、やっとこの苦痛から解放されるのだと言う喜びだけで、篠崎が達したことにも気付かなかった。

〜〜〜〜

「何が一番辛かった？」
「……全部…おちんちん、全部…」
「うん…そうだな、辛かったな…」
けれど、これからは──。今から少しだけ頑張れば──少しだけ耐えれば、おちんちんはなくなる。もう勃起を我慢する必要がなくなるのだ。
「諒、大丈夫、怖くない」
「しのざき…」
「目が覚めたらおちんちんはなくなっているよ」
「ぁ…こわ…」

「大丈夫…怖くない」
「ん……」
「寝ている間に全て終わるよ…大丈夫」
「篠崎…」
「おちんちん、辛いもんな」
「んっ、ぎゅうぎゅう辛い…」
「ああ、目が覚めたらもう苦しくないよ」
「……起きたら…いてくれる？」
「もちろん。ずっとそばにいるよ」

八.
「ん……」
「諒、気が付いたか。気分はどうだ？」
　頭がボーッとしている。目に入るのは真っ白い天井。そうだ、全身麻酔で手術を受けたのだ。視線を横にずらす。篠崎が心配そうな顔で覗き込んでいた。
「あ……ぼく、ぼく……」
「諒、よく頑張ったな。ちゃんとおちんちんないないできたぞ」
　優しく褒められて、頭を撫でられてふわふわする。

〜〜〜〜

十一.
　退院から一ヶ月。患部のひきつりも、痛みもなくなった。最近では痛みよりも性欲の疼きが耐えがたいほどだ。そして、ようやく――。
　安西は篠崎に背後から抱えられるように床に座っていた。深く寄り掛かるようにされているため、目の前の大きな鏡にはおむつのおしりの方までが映されている。
「こわい…」
　やっと、安西がそこを目にするときがきた。怖い。ドキドキする。グロかったらどうしよう――。
「大丈夫…」
　ペリペリとオムツが剥がされていく。次第に鏡にそこが映されていく。

「ほら、綺麗だ」
「あああああああ———っっ！！！いやだだっ！いや、おぢんぢんっ！いやぁああ——！！！」
　おちんちんが、ない。わかっていたはずなのに目に映るそれを受け入れられない。
「諒！諒！落ち着け！」
「いやあああああ——！！！ぼぐの！ぼぐのおぢんぢんんんんん〜〜〜っ！！！！！！」
「諒！諒！」
「あ、あ、あ、あ、あ〜〜〜〜〜っ！！！」
「諒っ！」
　暴れる体をぎゅうぎゅうに抱き締められ、抑え付けられる。
「諒、諒……」
「あ……ああ…ぼくの……」
「うん……諒くんのおちんちんはもうないよ…」
「やだ…ぼくの…」
　少しずつ声のトーンが落ちていく。嘘だ、嘘、と繰り返す。
「諒…おちんちんなくなって嬉しいだろう？」
「嬉しい……？」
「ああ。おちんちんを貞操帯に締め付けられて、苦しみながら勃起も射精も我慢するのは辛かったろう？」
「あ……」
　篠崎の言葉に気が狂いそうなほど苦しかった日々が思い出される。
「お仕置きだと貞操帯に痒み成分の液体を入れられて、苦しかったな？」
「あ……ああ……くる、苦しかった…」
「もう一度されたいか？」
「や！！！！やだぁ！！！やだぁああ！！！」
「諒！落ち着け…！」
「やだぁ！！おちんちん苦しいのやだぁああ！」
　大丈夫、大丈夫と胸をポンポン叩かれる。少しずつ呼吸が落ち着いていく。
「そう、ゆっくり息をして」
「んっ、はぁ…」

「ほら、見てごらん。諒くんにはもうおちんちんはないんだよ。だからもうおちんちん虐められて苦しい思いはしなくていいんだ」
「あ、あ、……ほんと…ない…嬉しい…おちんちんない…うれし…」

～～～～

「よく見てごらん。クリトリスの下がおちんちんがあった場所だよ。ほら、ここに尿道口があるだろう」
「…女の子みたい…」
「本当は、陰茎を切除するときは尿道の位置をもっと下げるんだ。男の尿道の位置ではトイレでの排泄が困難になるからな。だが、そのままにしておいた」
「……なん、で…？」
「おちんちんがなくなって、立位での排泄もできなくなって、このままでは座位でもトイレでは排泄できない」
「え……？」
「恥ずかしいな、三十にもなって、トイレで排泄できないなんて」
「あ、うそ…や、そんな…」
「大丈夫、俺がいるだろう」
「しのざきが…してくれる…？」
「ああ…もちろん。ほら、ごらん。ちゃんと玉もある。今まで通りちゃんと精子も作られるよ。おちんちんがなくなってクリトリスができた以外、今までと何も変わらないよ」
「射精は…？できる…？…どこから…？」
「おちんちんがあったところ…かな」
「ん…ここ？」
　触れないぎりぎりのところで指を指す。
「そう……せっかくだからクリトリスも触ってごらん」
「やっ、こわ、」
「なら俺が触ろう。よく見ていなさい」
「あ、あ……こわ……あ―――っっっ！！！！」
　いつの間にかローションを纏わせた篠崎の指が作られたクリトリスに触れる。亀頭だったそれは面積が小さくなったせいか以前よりひどく敏感だった。触れるか触れないかの強さでそっと撫でているだけなのに、安西はビクンビクンと体を跳ねさせる。手術に至るまでのきつい射精管理と術後の禁欲により更に敏感になっているらしい。
「かわいい…かわいいよ諒…男の子なのにおちんちんなくしてこんな可愛いクリトリスをつけて…」
「ああっ、あっ、」

怖がっていたはずなのに、腰を押し付けすりすりと篠崎の指にクリトリスを擦り付けている。
「かわいい。……諒くんはこれからどんな風に射精するんだろうな？扱くところもないのに上手に出せるかな？」
安西は青ざめた。亀頭への刺激だけでは射精できない。けれど、篠崎の言う通り扱くべき陰茎がない。まさか――
「イきたいのにイけない、出せないままどんどんここに…」
「あっ」
残されたままの玉が揉まれる。
「精子が溜まっていったらつらいな？」